

ジブリ版「借り暮らしのアリエッティ」は何語を話すのか：

日本化した『床下の小人たち』

田中 美保子

1. はじめに

2. 原作『床下の小人たち』再考

2-1. 新しいファンタジーの先駆けとして

2-2. 目に見えないものを見るように描くということ

3. アニメ版『借りぐらしのアリエッティ』

3-1. 原作の改変

3-2. 原作に付け足されたもの

4. まとめ

<引用1>

「……もってるものは、なんでも借りたもので、じぶんたちのものっていうのはないんだね。なにもないのさ。それでも、(…)この世界はじぶんたちのものだと思っているんだよ。」(19)

<引用2>

「つまり、人間ってものは、つまらない雑用をするために、つくられたものだと思ってるんだね(…)だけど、内心では、(…)こわがっているんで、そんなにちいさくなってしまったんだっていうわけなのさ。親から子、子から孫と、だんだんちいさくなって、ますます、身をかくして住むようになったんだね。昔は、イギリスでもあちこちで、《ちいさい人たち》の話しをあたりまえのようにしていたらしいからね。」(20)

<引用3>

「ちかごろではね、と、メイおばさんが、ゆっくり話をつづけました。「そういうものがいたとしたところで、せいぜいずっといなかのほうの、古い、しずかな家だけだろうよ——住んでいる人間たちが、判でおしたような暮らしをしているような古い家だけさ。きまりきったことしかおこらないってことが、安全のしるしなんだよ(…)。」(20)

<引用4>

(…)「きみ、飛べる？」

「飛べないわ。」アリエッティは、びっくりしてこたえました。「あなた、飛べるの？」

男の子は、(…)「飛べるもんか！」とおこったようにいいました。「妖精じゃないもん！」

「あら、わたしだって、ちがうわ。」と、アリエッティがいいました。「だれだって、妖精じゃないわ。わたし、妖精なんて信じない。」

男の子は、アリエッティを、ふしぎそうに見ました。

「妖精を信じないって？」

「ええ。」と、アリエッティがいいました。「あなたは、信じて？」

「信じやしないさ！」

ほんとに、おこりっぽい男の子だ、とアリエッティは思いました。「わたしのおかあさんは信じてるのよ。」と、アリエッティは、なぐさめ顔にいました。「いちど、見たことあるんですって。(…)」

男の子が、ひざをまげて、しゃがみこんだので、アリエッティは、顔に息が分かるのを感じました。「どんなだったって？」と、男の子がききました。

「ホタルくらいの大きさで、チョウチョみみたいな、羽根があったんですって。とてもちいさい、かわい顔が、すっきりかがやいていて、火花みたいに動かし、ちいさな、動く手もあったって話よ。顔つきは、しょっちゅう変わっていてね、ほほえんだり、なにか、ちらちらするみたいなんですって。とても、早口にしゃべってるように見えたっていうけど——ひとことも、きこえなかったんだそうよ……」

「そう。」と、男の子は、おもしろがっていましたが、しばらくして、ききました。「それでどこへいったの？」

「ただ、いっちゃったのよ。」と、アリエッティがいいました。「おかあさんが見たときは、クモの巣にかかったようだったって。もう、暗くなっていたしね。冬の夕方五時ごろで、お茶の時間がすんでたっていうから。」(105-106)

<引用5>

アリエッティが、むきだしの腕で、しずかに葉をかき分けると、水のしたたりがスカートの上におちてきて、赤いくつがしめっぽくなりました。それでもさきへのぼっていきました。ときどきは、草の根につかまったりしながら、コケやスマレや、はいまわるクローヴェアの葉などの、ジャングルのなかへ、のぼっていきました。腰ぐらいいまでしげった草の葉は、見たところ鋭くても、さわればやわらかくしなって、通りすぎるあとから、しずかにもとにもどりました。(…)アリエッティは、ふかしのわのあるサクラ草の葉のうえに、トンと腰をおろしました。空気は、かおりにみちていました。(98)

<引用6>

それは、目でした。というよりも、目のように見えたのです。すんで、あかるくて、空のような色でした。アリエッティのおなじような目のかたほうで、ただ、たいへん大きいのです。きらきらした目です。おそろしさに、息をこらして、アリエッティは、からだをおこしました。すると、その目が、まばたきをしました。巨大なまつげの列が、弓なりにおりてくると、また、まいあがって見えなくなりました。用心がかく、アリエッティは、足を動かしました。音をたてずに、草の茎のあいだに、しのびこんで、しずかに土手をすべりおりようと思いました。「動いちゃいけない！」という声がありました。その声も、目とおなじように、おおきかったのですが、どこか、おさえつけたようなところがあって——三月のころのあらしの晩、格子窓を吹きぬける、うずまく風のような、かすれたひびきをもっていました。(100)

<引用7>

(…)それから、みんなの生活に、きみょうなことが、はじまりました。夢にも考えられないような借り暮らし——まことに、黄金時代でした。(180)

(…)ホミリーのじまんの部屋なのです。壁紙には、紙くずかごからもってきた古い手紙をつかってありましたが、ホミリーは、それを横につかって、かいた字が、床から天井へと、たてに縞になるようにはってありました。その壁には、まだ若いころのヴィクトリア女王の肖像画で、色だけちがうのが、いくつか、かけてありました。それは郵便切手なのです(…)。マッチ箱でつくった、たんすも一つありました。(…)円テーブルは、ポッドがつくったもので、西洋将棋の馬のこまから馬の首をとり去って、その彫刻をした土台のうえに、錠剤のはいついた木箱の箱をとりつけたものです。(26)

(…)ポッドは、このごろは、借りにいくのではなくて、休みにいくのでした。[ソフィ大おばさんの]部屋が、いわば、ポッドのクラブになったようなものです。つまり、《あれやこれやから逃れるために》、いくことのできる場所でした。ポッドは、その財産が、いささか、わずらわしくなってきたのです。ポッドは、どんな思いきった夢を追ったときでも、かつて、これほどの借りものを、心にえがいたことはありませんでした。ホミリーが停止を命ずべきときだと、ポッドは思いました。たしかに、いま、家のなかには、じゅうぶんりっぱでした。あの、宝石のついたタバコ入れ、ダイヤモンドをちりばめた細密画、金銀の針金細工のついた化粧箱や、ドレスデン製の小さな人形——それは、みんな、応接間の飾り戸棚にあったものだということを、ポッドも知っていたのですが——そういったものは、べつに、必要なものではなかったのです。(186-187)

<引用8>

「なにをたべていたの？ほんとに、イモムシをたべたのかしら？」

「(…)そんなものたべるもんかね。すばらしい暮らしだったんですよ——アリエッティが、あこがれていた通りの。すまいも、とてもぐあいがよくてね。アナグマの巣っていうのは、まるで村のようなもので——廊下や、部屋や、物置さが、たくさんあったのさ。ハシバミの実や、ブナの実や、クリなんかも集められたし、麦もひろってこられたんだよ(…)」(237)

「でも、危険があったじゃないの。」とケイトがさげびました。「イタチや、カラスや、テンや、いろんなものがいたでしょ？」

「それはそうさ。」とメイおばさんは、うなずきました。「もちろん、危険はあったさ。どこにでも、あぶないことはあるからね。だけど、人間にも危険はあるんだし、それにくらべれば、たいしたことはなかったろうよ。なんにしても、戦争つものだけはなかったからね。」(238)

*以上、すべて()内数字は林容吉訳『床下の小人たち』岩波書店(1969年)の頁数。下線、[]内、(…)は筆者による追記。ルビは省略。